

〈巻頭言〉

ターミナルケアにおける行動科学の役割

総会のテーマが、「ターミナルケアの行動科学」と決められた。しかし残念なことに、この学会の創立者である中川米造先生が昨年他界され、総会には参加されなかった。

中川先生は、ご自宅を「死を迎える所」として選ばれ、ご家族の手厚いターミナルケア（ホスピスケア）を受けられ、在宅ホスピスケアの見本を残されたと思う。

ご次男の感想によれば、「『親父は、一寸本屋に行ってくるぞ』と言って、普段着のまま、つかかけの下駄履きで、わが家の玄関を出て行き、後ろ姿だけを残して、天国に導かれてしまった」、と言われたそうである。

それはまさに、私どもが、「死について」いろいろと模索している現状に対して、中川先生は、「死は全く日常の自然の成り行きなのだよ」と、身をもって教えていただいたのだと思うのである。謹んで、ご冥福をお祈り申し上げたい。

会長講演としては、次の6項目を述べた。

- ①日本保健医療行動科学会との出会い
- ②私の行動変容
- ③ターミナルケア（ホスピスケア）との関わり
- ④ホスピスケアにおける家族（遺族）の満足度について
- ⑤ターミナルケアにおける自己決定の哲学
- ⑥行動科学の役割・21世紀への展望

山崎久美子東京医科歯科大学教授との共同研究として、ターミナルケアを受けた患者とその家族の「満足度」調査を行うことができた。その結論は次の如くである。

- ①ホスピスで受けたケアに対する家族の満足度は非常に高いことが明らかにな

った。

②患者・家族の終末期の充実には、ホスピス病棟では、ケアに多くの関わりがある。

③ホスピスで死を迎えた家族のグリーフワークは順調に進んでいることが示唆された。

④喪の作業には時間経過が必要だが、約3年の歳月により平常の生活に近づくことが示唆された。

⑤妻は夫に比べ、配偶者の入院中の主観的負担感が大きい傾向を認めた。

⑥夫は妻に比べ、配偶者を亡くした後の生活満足度が全般的に低い傾向がある。

この機会に、ターミナルケアにおける自己決定についての哲学的検討を若干試みた。

現在、人間存在を尊重することは、その個人の自己決定を重視することのように解釈されているが、それではたしてよいのか、という疑問がある。自己決定に関して他者は、一切口を挟むなというのが一般化した通念のようである。しかし、その自己決定のプロセスに、なぜ介入してはいけないのかが問題である。キルケゴール的な発想からいえば、「あれかこれかの選択」、「死にいたる病」への意思決定に際して、個人が単独で、独り孤独な状態で、意思決定ができるものなのかという疑問がある。

もし、医療不信による選択がなされた場合に、医療者が意見を述べることを拒否されるとしたら、どうなるのであろうか。

インフォームド・コンセントにおける自己決定は金科玉条であり、他人がとやかくいうべきものではないとされている。しかし、たとえば、「死にたい願望」の患者さんに、考え直してほしいと、医師が勧めることが許されないのであれば、いったい、ヒューマニズムにおける「共に生きる」という立脚点はどうなるのであろうか。そうした意味では、パターンリズムにも、医療の現場では利点もあるはずであり、その見直しが必要だと思うのである。

あらゆる場面での人間行動の中で、「死を見つめて生きる人間」はまさに、リアリティの極限に存在し、その苦悩への対応が、行動科学の大きな使命ではな

いかと考える。

結局、ターミナルケアの最終目標は、患者とその家族の「安寧」「幸せ」「満足度」を満たす、「全人格的救済」にあるといえる。

そして、人間存在の危機にもなる、死別後の悲嘆をいかに軽減できるかが、行動科学のこれからの役割ではないかと考えている。

ここで私なりに、行動科学的観点から看護についての定義を明確にしておく。

すなわち、「看護（ケア）とは、日常生活における実存的関わり of 全て（愛の行為）である」という生活学である。

それは、精神的変容（心の変化）に関係が深い。重大な意思決定には、大きな飛躍のエネルギーが必要である。すなわち心の突然変容である。そして、それには、愛の行動力学が必要であろう。愛は、「永遠の幸せに対する願望であり、時間と空間を超えるもの、肉体的生（生命）を超えるものだ」、と私は考えている。そこで、そうした観点から、ターミナルケア（ホスピスケア）を考えると、それは、未知なるものへの挑戦・冒険であり、〔死の受容〕に至る愛の旅である。また、家族における人間関係（愛）の行為〔行動パターン〕である。死別後の喪失悲嘆の中で、遺族の心の中には、死者がいつまでも生き続けていると考えたい。

したがって、行動科学の最終的な役割は、人間愛（ヒューマニズム）に基づく関わり of 全てである。その愛の根源は、「共に生きるための」行動科学的アプローチであると思う。

行動科学の将来に対する展望を一言述べたいと思う。「人間いわく、不可解」という藤村操の残した言葉の意味を噛みしめている。

人間、その理解は本当に難しい。人は、わかったようなことを言うけれど、どれほどのことが真実に理解されているのであろうか。

医学を含めた、自然科学だけでは割り切れない、人間に対する複雑系科学の追求や、ファジー領域の研究が、これからのわれわれの行動科学の果たすべき役割になるのではないかと考えるのである。

谷 荘 吉（小松病院）